

人と技 つなぐ^え愛^が顔の森・未来

第54回

全国林業後継者大会 愛媛2026

記録誌

令和8年5月16日(土)

13:30 ~ 16:30

久万高原町産業文化会館



育てるけん 伊予の国から 緑の宝

全国植樹祭 愛媛 2026

第76回全国植樹祭関連行事

【主催】 愛媛県林業研究グループ連絡協議会、全国林業研究グループ連絡協議会、久万高原町、愛媛県

【後援】 林野庁、一般社団法人全国林業改良普及協会、公益社団法人大日本山林会

【大会運営】 第54回全国林業後継者大会愛媛県実行委員会

目 次

■ 大会概要	2
■ 大会プログラム	3
■ オープニング	4
■ 開会式典	
開会の言葉	5
主催者挨拶	6
歓迎の言葉	8
来賓祝辞	9
■ 登壇者の紹介	11
■ 活動発表	
西予市森林組合	13
株式会社武田林業	15
株式会社堀川林業	17
久万高原町林業戦略課	19
株式会社さんえい	20
愛媛県立上浮穴高等学校	21
■ パネルディスカッション	23
■ 閉会式典	
大会宣言	33
次期開催県挨拶	34
閉会の言葉	34
■ 展示、物販、大会記念品等	35
■ 大会の状況	37
■ 協賛	41

大会概要

開催目的

この大会は、第76回全国植樹祭関連行事として、全国の森林・林業関係者が一堂に会し、林業の振興と森づくりの重要性について意見を交わし、林業を担う人たちが希望や誇りをもって働き続けられる林業の魅力を全国に発信することを目的に開催します。

大会テーマ

人と技 つなぐ愛顔(えがお)の森・未来

開催日時

令和8年5月16日(土) 13:30～16:30

開催場所

久万高原町産業文化会館
愛媛県上浮穴郡久万高原町久万188

主催

愛媛県林業研究グループ連絡協議会
全国林業研究グループ連絡協議会
久万高原町
愛媛県

後援

林野庁
一般社団法人全国林業改良普及協会
公益社団法人大日本山林会

大会運営

第54回全国林業後継者大会愛媛県実行委員会

[構成団体]

愛媛県林業研究グループ連絡協議会
愛媛県森林組合連合会
愛媛木材青年協議会
愛媛大学
久万高原町
愛媛県

大会プログラム

オープニング

13:30～13:50

久万高原町制作映画『久万山を歩いて、』
石鎚天狗太鼓演奏

開会式典

13:50～14:20

開会の言葉	第54回全国林業後継者大会愛媛県実行委員会会長	菊池 俊一郎
主催者挨拶	愛媛県副知事	菅 規行
	全国林業研究グループ連絡協議会会長	黒田 仁志
歓迎の言葉	久万高原町長	河野 忠康
来賓祝辞	林野庁長官	小坂 善太郎 様
	一般社団法人全国林業改良普及協会副会長	東川 政富 様
来賓紹介		

活動発表

14:20～15:10

西予市森林組合	参事	山本 和可 氏
	会計主任	辰己 恵 氏
株式会社武田林業	代表取締役	武田 惇奨 氏
株式会社堀川林業	代表取締役	堀川 隆幸 氏
久万高原町林業戦略課	課長	小野 哲也 氏
株式会社さんえい	代表取締役	佐ヶ山 幹彦 氏
愛媛県立上浮穴高等学校		森林環境科生徒の皆様

パネルディスカッション

15:20～16:15

【テーマ】 「森林・林業を次世代へ引き継ぐための挑戦」
～いま求められるもの、取り組むべきこと～

【コーディネーター】	愛媛大学 副学長	杉森 正敏 氏
【パネリスト】	愛媛県林業研究グループ連絡協議会 元会長	増田 清 氏
	西予市森林組合 参事	山本 和可 氏
	会計主任	辰己 恵 氏
	株式会社武田林業 代表取締役	武田 惇奨 氏
	株式会社堀川林業 代表取締役	堀川 隆幸 氏
	株式会社さんえい 代表取締役	佐ヶ山 幹彦 氏

閉会式典

16:15～16:30

大会宣言	愛媛県立上浮穴高等学校 森林環境科3年	山本 琴美 氏
次期開催県挨拶	第55回全国林業後継者大会奈良県実行委員会会長	秋山 敬太 氏
閉会の言葉	第54回全国林業後継者大会愛媛県実行委員会副会長	安田 宗一 氏
		芝 芳亀

オープニング

久万高原町制作映画『久万山を歩いて、』

久万高原町では、人と山の距離を縮めたいという思いから、人と山・森林の関係を描いたドキュメンタリー映画を制作しました。山に囲まれ暮らしながらも、私たちはいつの間にか山との距離を感じるようになり、山と人との関係も変わろうとしています。山を受け継ぐ山主、林業に携わる若者の姿を通じて、少しでも「山」に思いを向けてもらえたら嬉しいです。



石鎚天狗太鼓

石鎚山は、西日本最高峰にして、日本七霊山や百名山の一つとして数えられている山岳信仰の山で、石鎚山を囲む山麓地帯には、石鎚山を修験道の霊地と定める天狗飛来の伝説が数多く伝えられています。石鎚天狗太鼓は、石鎚山の麓に位置する愛媛県久万高原町(旧面河村)において、古くから伝わる天狗伝説をもとに、平成元年(1989年)に誕生した創作和太鼓集団で、地域の伝統芸能として親しまれています。



開会式典

開会の言葉

第54回全国林業後継者大会
愛媛県実行委員会会長

菊池 俊一郎



本日は、全国各地より星空と緑と清流の里、愛媛県久万高原町にお越しいただき、誠にありがとうございます。

ただ今より「人と技 つなぐ愛^え顔^がの森・未来」をテーマに「第54回全国林業後継者大会 愛媛2026」を開会いたします。



主催者挨拶

愛媛県副知事

菅 規行



皆様こんにちは。愛媛県副知事の菅と申します。開会にあたりまして、ご挨拶をさせていただきます。

本日、「第54回全国林業後継者大会 愛媛2026」を開催できますことを大変喜ばしく存じますとともに、小坂林野庁長官をはじめ、ご来県の皆様を心から歓迎いたします。

また、本県では初となります本大会の実施にあたりまして、開催地である久万高原町並びに関係機関の皆様方には多大なるお力添えを賜りましたことに、改めて深く感謝申し上げます。

愛媛県は県土の7割が森林に覆われ、その大部分を占めます民有林の6割がスギ、ヒノキなどの人工林となっております。特にここ上浮穴地域では、昭和44年に「上浮穴地方育林技術とその体系」を策定して、高密度植栽ときめ細かな森林施業によります優良材の生産に取り組み、本県の林業をけん引して参りました。

先人のたゆまぬ努力により大切に育てられた人工林は、現在8割余りが50年生を超えております。伐って、使って、植えて、育てることを繰り返して、森林資源を循環させることが重要となっております。

こうした中、「人と技 つなぐ愛顔^{えがお}の森・未来」をテーマに掲げます本大会に、全国の森林、林業関係者が一堂に会し、林業の振興と森づくりの重要性について意見を交わされますことは、担い手が希望や誇りを持って働き続けられる林業の魅力発信につながるものと、大変意義深く存じます。

本県につきましても、今年3月に「えひめ農林水産業振興プラン2026」を策定いたしまして、森林資源の有効活用や担い手の確保、生産力の強化などに重点的に取り組んでいるところでございます。

どうか皆様方におかれましては、活動発表や意見交換を通じて実り多い成果を収めていただき、引き続きそれぞれの地域で将来にわたって持続可能な森林経営を实践されますよう、心から願っております。

結びに、本大会の成功とご出席の皆様方の益々のご健勝、ご活躍を祈念申し上げまして、挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

主催者挨拶

全国林業研究グループ連絡協議会会長

黒田 仁志



We love forest。皆様、こんにちは。

本日はここ久万高原町において、「人と技 つなぐ^{えがお}愛顔の森・未来」をテーマに「第54回全国林業後継者大会」を開催いたしましたところ、公務ご多忙の中、小坂林野庁長官、沢田大日本山林会会長、東川全国林業改良普及協会副会長をはじめ、多くの皆様方にご参集いただき、誠にありがとうございます。また、ご来賓の皆様方には、日頃より我々林研グループの活動に深いご理解と温かいご指導ご支援をいただいておりますことを感謝申し上げますとともに、今後も変わらぬご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

そして、菅副知事をはじめ、愛媛県、愛媛県林研連、河野町長をはじめ、久万高原町の皆様には、本大会の企画から本日の運営に至るまで、大変なご協力をいただいております。本当にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

さて、我々林業界を取り巻く状況は、昨年秋に適正取引のガイドラインが示され、いよいよ生産者の目線に立った価格交渉が始まるというふうに期待をしていたところですが、降って湧いたようにホルムズ海峡の閉鎖、原油価格の高騰などが起き、結果、世界の全産業において大きな影響が出ており、明日の状況さえも見えないような状況が続いております。もちろん、我々の暮らしにも大きな影響を与えているわけですが、我々が営む林業という産業は、先ほどのビデオにもございましたとおり、50年、100年、それ以上のスパンでこのことを考えていく産業でありまして、あまり目先のことで一喜一憂するべき話ではないというふうにも考えます。

数多の先人たちも、幾多の天災や戦災を乗り越えながら、この素晴らしい森林を我々に引き継いでくれたわけです。私たちもしっかりと未来を見据えながら、新しい技術をしっかり取り込みながら、次の世代へ受け渡せるような森づくりを進めていきましょう。

全林研といたしましては、その一助となるべく、本年度より林野庁の推進する森業の皆様への普及に取り組んでいこうと思っております。時間がないので詳細に関しては割愛いたします。林野庁もしくは全林研のホームページでご確認いただければと思います。とにかく、これまで皆様方が一度はやったことのある活動をブラッシュアップし、ボランティアだった活動を有償化していく、そんなイメージで捉えていただければと思います。林業、そして山村を一つの方向からではなく、多方面から見直す良いきっかけになるのではないかなというふうにも考えております。

もう一つだけ大切なことを伝えたいと思います。先月も岩手県大槌町、昨年は大船渡や当県今治市でも大きな山林火災が発生しました。先人の残してくれた木々が瞬時に灰燼に帰す様は、まさに断腸の思いであろうと推察いたします。被災された方々へ心からお見舞いを申し上げますとともに、1日も早い復興をお祈りいたします。我が国で起こる山林火災は100% 人的要因によるものだそうです。我々林業に携わる者が、その原因とならないよう、しっかりと心掛け、行動していきましょう。

最後になりますが、本日ご参集の皆様方のご健康とご多幸を心からお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

歓迎の言葉

久万高原町長

河野 忠康



歓迎の言葉を申し上げます。

皆様、今日は「第54回全国林業後継者大会愛媛2026」の開催にあたり、全国各地より久万高原町へお越しをいただき、誠にありがとうございます。主催されます全国林業研究グループ連絡協議会をはじめ、開催準備にご尽力をいただきました関係者の皆様に心より感謝と敬意を申し上げます。明日の天皇皇后両陛下をお迎えしての全国植樹祭の前日の開催でございますが、初夏の素晴らしいお天気の下で開かれますことを大変にありがたく、嬉しく思っております。また、小坂善太郎林野庁長官様、菅規行愛媛県副知事様をはじめ、多くのご来賓の皆様にご臨席を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

とりわけ林野庁におかれましては、森林林業の成長産業化や森林整備の推進、そして担い手確保育成など、国の施策を力強く進めていただいておりますことに、現場を預かる自治体として深く感謝申し上げます。加えて、愛媛県におかれましても、県内有数の林業地である本町の取組を支えていただき、国、県、町が一体となった政策連携の下で前に進めておりますことを改めて心強く感じております。

本大会のテーマは、「人と技 つなぐ愛^え顔の森・未来」であります。森林林業は自然を相手とする産業であると同時に、地域の暮らしを支え、次の世代へ引き継いでいく営みです。その中心にありますのは人であり、現場で培われた技術であり、そしてそれらをつないでいく志でございます。

久万高原町は、四国山地の豊かな森林に抱かれた町で、愛媛県内でも有数の林業地として歩んで参りました。先人たちが手入れを重ねてきた森は、木材資源の価値はもちろん、水を育み、災害を防ぎ、地域の景観と文化を形作るかけがえのない財産であります。

一方で、担い手不足や作業環境の厳しさ、資材、燃料価格の変動、災害の激甚化など、林業を取り巻く課題は多く、決して容易な道のりではありません。だからこそ、地域の森を守り、育て、未来へつないでいく後継者の皆様の挑戦と活躍に、全国が大きな期待を寄せております。

本大会が全国の皆様の交流を深め、互いの知恵や経験を持ち寄り、人と技をしっかりとつなぎながら、笑顔あふれる森の未来を切り開く契機となりますことを心より願っております。久万高原町といたしましても、林業の振興と木材利用の拡大、そして人材育成に力を尽くし、国、県をはじめ、関係機関の皆様と連携をしながら、持続可能な森づくりを進めて参ります。

結びに、本大会の成功と、ご参会の皆様のご健勝、ご発展を心より祈念申し上げまして、歓迎の言葉といたします。本日はご来場、誠にありがとうございました。これからもよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

来賓祝辞

林野庁長官

小坂 善太郎 様



どうも皆さんこんにちは。ご紹介いただきました林野庁長官の小坂でございます。

本日、「第54回全国林業後継者大会」が「人と技 つなぐ愛顔の森・未来」をテーマに第76回全国植樹祭の関連行事として、愛媛県で初めて開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

また、全国よりご参加いただいた皆様方におかれましては、日頃の活動を通じて林業の普及、後継者の育成に取り組み、我が国の森林林業の振興に多大なるご貢献をいただいていることに対し、心より敬意を表させていただきます。

さて、昨年は、先ほどもお話がありましたけど、2月に岩手県大船渡市、さらには3月にはここ愛媛県の今治市において大規模な林野火災が発生するなど、全国至る所で林野火災や豪雨災害が発生したところでございます。今年も岩手県の大槌町で林野火災が発生するなど、引き続きこのような災害が起きております。被災された方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、林野庁としましては、一日も早い復旧に向け、取組を進めて参りたいと思います。また、災害はこのように復旧だけではなくて、予防を図ることが極めて重要でございます。国土強靱化実施中期計画に基づいて、森林整備対策、治山対策を計画的に進めるとともに、山火事につきましては、消防庁、また皆さんとともに、この予防活動を積極的に展開していく所存でございます。

こうした災害発生にも影響する気候変動等に対して、2050年ネット・ゼロ、この実現に貢献するため、本格的な利用期を迎える我が国の森林、この循環利用を確立することが極めて重要だと考えております。近年、木材は森林が吸収した二酸化炭素を長期的に貯蔵する資材として経済界を中心に関心や期待が高まっております。このような機運を好機と捉え、「森の国、木の街」として、木材利用の環境貢献の見える化を通じて建築物の木造化などの取組を進める。それとともに、山側におきましては、林業適地のゾーニング、集約化、路網整備といった取組により、国産材の安定供給、さらには確実なる再造林などの推進を図り、「伐って、使って、植えて、育てる」この循環を確立することが極めて重要だと考えております。また、このような循環を確立するためには、林業がきっちり儲かる産業として成り立っていく必要があります。このためには、新しい技術、イノベーション、色々なものを取り込んで、林業の採算性を高めることが不可欠でございます。従来の林業技術を生かしつつ、新しい技術を導入して、従来とは違う新しい林業を展開していくことも、今、求められているところでございます。

本年はこのような中、我が国の森林・林業・木材産業行政の基本的な方向を定める森林・林業基本計画を変更する5年に一度の重要な年でございます。このようなことを新しい基本計画に位置づけ、様々な課題がございますが、その課題の先には大きな可能性があると思います。そういった可能性に向かって、森林・林業・木材産業の全ての関係者が未来に希望を持っていいただけるような計画になるように、現在検討を進めているところでございます。

そして、このような施策を進める上で、そして実践していく上で、本日お集まりの皆様方の益々の活躍、役割が重要だと思っております。林野庁といたしましては、皆様が林業に対し、これまで以上に希望と誇りを持って取り組めるよう、林業の安全性や生産性の向上、そういったものに基づく新技術の開発や普及、担い手育成等々、様々な施策に取り組んでいく所存でございます。

最後になりますが、本大会を主催される皆様方のご尽力に感謝申し上げますとともに、ご参集の皆様方の益々のご健勝、ご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

来賓祝辞

一般社団法人全国林業改良普及協会副会長 東川 政富 様



ご紹介いただきました。私、全国林業改良普及協会の東川でございます。私、隣の香川県で120ヘクタールほどの山林を所有して、いわゆる自伐林家として、うちの長男と一緒に力を合わせて森林整備をやっている者の一人です。この3月まで二人で、面積が今年は少なかったんですけども、60年生のヒノキ林を間伐して搬出しました。

後継者大会にあたりまして、一言祝辞を申し上げたいと思います。

本日、ここに全国各地から意欲あふれる林業関係者の皆様をお迎えし、「第54回全国林業後継者大会」が、ここ愛媛県久万高原町において盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

森林は今、カーボンニュートラルの実現や循環型社会の構築に向けて、かつてないほど大きな期待が寄せられています。この期待を確かな未来へつないでいくためにも、現場における技術の研鑽と地域に根差した組織の力が不可欠であります。今回開催地となりました愛媛県は、古くから林業研究グループの活動が極めて活発な地域として知られております。特に若手後継者の皆様がICT活用や新たな事業技術に果敢に挑戦されている姿や、また女性グループの皆様が自由な発想で森の恵みを暮らしに生かす活動を展開されている様子は、まさに全国の模範となるものであると思います。また、こうした活動を支える普及指導員との緊密な連携により、地域一体となって課題解決に取り組む愛媛のスタイルは、我々が目指すべき林業の振興の理想の姿の一つであると感じております。我々全国林業改良普及協会は、こうした現場の創意工夫を全国へ広め、知識と技術を繋ぐことを使命としております。変化の激しい時代だからこそ、情報や意見を共有できる、本大会のような横のつながりが大切であると思います。仲間と切磋琢磨し、時には悩みを共有することが、次世代の林業を切り開く力強い一歩となります。

結びに、本大会の開催にあたり、並々ならぬご尽力を賜りました地元愛媛県と久万高原町、愛媛県林業研究グループ連絡協議会、並びに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。皆様が本大会での出会いを糧に、地域の、そして日本の林業の未来を担うリーダーとして、益々ご活躍されますことを心より祈念いたしまして、私の祝辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

登壇者の紹介

コーディネーター

愛媛大学

副学長 **杉森 正敏 氏**

専門分野 森林資源材料学。

1998年に農学部森林資源学コースへ赴任し、木材に関する研究に取り組み、現在は光が木材に及ぼす影響を研究している。地域協働推進機構長・イノベーション創出院長として、東予・中予・南予および今治サテライトで、林業を含む地域産業の担い手育成を目的とした社会人向けリカレント・リスキリング教育や高大連携教育を推進。さらに紙産業イノベーションセンター（四国中央市）や南予水産研究センター（愛南町）において、産学官民協働による地域産業の持続的発展に取り組んでいる。



活動発表者

パネリスト

西予市森林組合

参事 **山本 和可 氏** 会計主任 **辰己 恵 氏**

若手林業従事者が感じる林業の魅力を「山護人(やまもりびと)物語 若手職員インタビュー」として、SNSを通じて情報発信し続け、ここ数年で就業者が増えた事業所。

同組合ではキャンプ、イベントなどを提供する場所「MORIT AKANMA」を整備し、人々と森を繋げて、人々が遊び育つ(育てる)場所」という思いを込めており、「MORIT」とは、森のメリットを存分に活かす場所をイメージした造語であり、毎年、小さな子どもから大人まで楽しめる「MORIT AKANMA 山の日」などのイベントを開催している。



活動発表者

パネリスト

株式会社武田林業

代表取締役 **武田 惇奨 氏**

松山市出身。2017年に地域おこし協力隊として内子町にJターン。同年、木を伐らない林業会社、(株)武田林業を設立。

愛媛県旧広田村で四面無節のヒノキ林業を営んでいた祖父の影響を受け、山と林業に関心を持つ。

人々が生きる空間に木や森と接する機会を提供する「森の入り口づくり」とおとして、山林活性化を推進している。

林業・山間部に対するDX化支援や、香り製品の製造販売(アントキノヒノキ)、イベント開催(ワンツーツリーフォレスト)、自治体への脱炭素化支援など地域と一体となった取り組みを展開している。



活動発表者

パネリスト

株式会社堀川林業

代表取締役 **堀川 隆幸 氏**

4世代にわたって林業経営に携わり、株式会社を設立。

森林の適正な管理を担う森林経営管理制度に積極的に取り組むとともに、令和4年からスタートした愛媛県で初となる林業大学校の「南予森林アカデミー」に協力し、人づくり対策にも取り組む。また、同アカデミーの第2期生、第3期生の2名を受け入れるなど地域雇用の拡大や担い手の確保・育成への取り組みは、地域の林業事業体の模範となっている。

さらに、ドローンの導入や森林GISの配備など新しい林業を手掛け、林業経営の合理化にも力を注いでいる。



活動発表者

久万高原町林業戦略課

課長 小野 哲也 氏

「久万林業」をけん引する地元役場の林業戦略課長。

先進林業地として森林経営管理制度に先駆け、平成16年度からスタートした中予山岳流域林業活性化センターを中核とした「久万林業活性化プロジェクト」に当初から携わる。

また、久万高原町では、新たな森林ビジネスの構築や地域課題の解消を図るため、令和4年2月に第3セクター「株式会社林業商社天空の森」を設立し、森林経営管理制度における全町規模での意向調査に取り組むなど、町がリーダーシップを発揮しながら地域林業の基盤強化に努めている。



活動発表者

パネリスト

株式会社さんえい

代表取締役 佐ヶ山 幹彦 氏

高性能林業機械の導入による労働生産性や労働安全の向上を図り、久万高原町が取り組む「久万林業活性化プロジェクト」による集約化施業を通じた搬出間伐を推進。

久万高原町内で、不在村地主の山林を購入・集約化し、現在では約500haの山林を管理するまでに急成長し、雇用拡大しながら、主伐・再造林にも取り組む。

さらに、提携会社(同)いろはを設立し、山で切り捨てられるクロモジに着目した商品や木製品を開発し久万高原町内の道の駅やネットショップ販売を展開している。



活動発表者

愛媛県立上浮穴高等学校

森林環境科生徒の皆様

林業を総合的に学ぶ森林環境科を有している県内唯一の高校。

林業インターンシップや次世代林業研修では、愛媛県や林業研究グループなど関係機関と連携した活動、課題研究では、地域資源を活用した商品開発

に取り組み、その研究成果を県内外に発信している。また、久万林業まつりなどの地域行事に積極的に参加するとともに、森林・林業に関する出前授業、町内産スギを使用した楽器づくりや演奏会を実施するなど、木材利用の拡大や木育活動を通じて地域活性化に貢献している。



パネリスト

愛媛県林業研究グループ連絡協議会

元会長 増田 清 氏

所有山林について、「豊かな自然環境の保全と木材生産を両立する健全な森林育成」の経営方針のもと、通直で完満な材の生産、高性能林業機械や森林情報のデータベース化など最先端技術を導入した計画的かつ効率的な施業に取り組む。

平成7年設立の第3セクター「株式会社エフシー」では、役員として、長年培った技術と経験に基づく高い指導力で技術者養成を行うなど地域の担い手育成を牽引している。県林業研究グループ会長として優れた指導力を発揮し、地域と国とのパイプ役を務めるなど、県全体の林業の発展に大きく貢献してきた。



活動発表

西予市森林組合

参事 山本 和可 氏



山本氏

それではよろしくお願いいたします。会場の皆様、ご紹介いただいた西予市森林組合の山本と申します。こちら辰己と申します。先頭バッターですね。若干というか、かなり緊張しておりますが、今から、よろしくお願いいたします。

それでは早速ですが、お話しさせていただきたいと思います。西予市の取組についてということで、まず、西予市について、それから林業のイメージ、それからホームページのリニューアル、Instagramの活用、それから最後に、効果と今後ということで、発表させていただきたいと思います。

まず西予市という所ですが、一番右下にあります、ここですけれども、愛媛県の南部に位置しておりまして、平成16年の4月に、明浜町、宇和町、野村町、城川町、三瓶町の5町が合併して誕生しました。人口はおよそ3万2千人、総面積は約514平方キロメートル、そのうちの75%が山林となっております。西予市森林組合は野村町というところに事務所を置いており、主に宇和町、野村町、城川町の3町で事業をさせていただいております。

今日の発表の主旨である、なぜSNSを始めたかということになりますが、ちょうど今から5年前の内部からの意見ですけれども、まず、西予市森林組合の認知度を上げたい。それから林業のイメージを変えたいということで、SNSに取り組んでいった訳ですが、当時と申しますか、今でもなんですが、林業のイメージは、担い手不足とか危険とか、汚いとか、そういったイメージ、そしてその時の西予市森林組合の認知度はほとんどなかったと思います。高齢の方は若干知っていたんですが、小さなお子様を持つ若い世代の方に対する森林組合の認知度はほとんどなかったと思います。その時、森林組合の存在や職業として認知してもらうにはどうすればいいのかということで、SNSの活用に取り組みま

会計主任 辰己 恵 氏



した。そして、一番初めに取り組んだのがホームページのリニューアルということになります。

こちらは、今、組合が掲載しているホームページのトップページですが、就職を検討している人がその会社で働きたいと思ったら、まずはホームページを検索すると思います。かつての西予市森林組合のホームページはあってないようなもので、うちに就職をした職員から、当時、左におります辰己もその時の職員ですけれども、ホームページがなかったことで情報がなく不安でしたと聞いていたのも、このリニューアルの一つのきっかけとなりました。トップページのこの真ん中ですかね、この木を切っている、これ、本当は動画になっているんですが、まず、ホームページを開いた時にこの動画が映るようにして、見る人を惹きつけるような感じにしております。その動画を流しながら、当時のことを話したいと思います。静かに立ち上がる動画になりますが、この動画はホームページの要となるように、こだわりを持って作成しました。制作だけでも半年間を費やしたのを覚えています。このホームページを公開してすぐなのですが、全国の森林組合から結構問い合わせがありました。内容としましては、この動画とか、それからホームページの内容を使わせてくれ、そういったような内容が多かったと覚えています。

他に西予市森林組合が「MORIT」という施設を運営しているのですが、その施設の発端もこの撮影した時だったことを覚えています。このSNSの提案をしてくれたのが誰かという辰己なんです。私、個人的ですけども、イベントとかSNSなどは女性の方が長けていると思います。今後そういった取組をされている方は、ぜひ女性の意見を取り入れてみることをお勧めしたいと思います。

この雨のシーンですが、これは私が裏から水道のホースで雨を降らしている。この日、本当は晴れだったんですけどですね、そういう苦労した思い出もある動画となっております。

ます。

それでは、ここで動画を終わろうと思います。

辰己氏

西予市森林組合、辰己と申します。よろしくお願ひいたします。先ほど山本参事の話にあったように、林業や森林組合自体が身近でない人たちがほとんどだと思います。若い世代の担い手は、今すぐにでも確保しないと、どんどんプロフェッショナルな人たちとの年齢差が出てきます。世代間の年齢差があまり広がらない程度に、コンスタントに人員確保をすることが早急の課題だと思います。

そのためには、林業、森林組合をどんどん若い世代、また子供さんたちのいる親世代にアピールしていかなければなりません。また、アピールするにあたり、西予市森林組合としての個性を出したかったので、「山護人」というロゴを作り、役職員が着用するポロシャツなどに印字できるようにしました。林業が職業選択肢の一つになるためには、林業って西予市森林組合ってちょっとカッコいいかもと思ってもらえることだと思います。今働いている従業員が自分の職場について、そこで働いているということに自信を持てるようにすることも重要だと思います。この画像にあるように、イベントのときには山護人のバックプリントが入っているユニフォームを着用しています。

続いて、Instagramの活用についてです。ホームページロゴマークの次にInstagramのアカウントも作りました。「山護人」と「MORIT AKANMA」の2つのアカウントです。「MORIT AKANMA」は、ホームページを作ると同時に、たくさんの人に森林について慣れ親しんでもらうために作った山の中の広場です。向かって左側が山護人のアカウントです。こちらでは西予市森林組合からのお知らせや組合活動、林業の仕事内容に特化して投稿しています。向かって右側の「MORIT AKANMA」のアカウントでは、「MORIT AKANMA」で行われた研修、イベント、木育事業を中心に投稿しています。また、「山護人」のアカウントではホームページとは区別したいため、投稿内容は少し気軽な感じにしています。また、個性を出したいため、林業の仕事内容をメインでは投稿していません。「MORIT AKANMA」のアカウントでは、イベントや研修など家族向けにした内容を投稿しています。近年のキャンプブームもあり、幅広い年齢層の方に見られています。

「MORIT AKANMA」では、毎年林業に親しむイベントを行っています。昨年は天候不良により中止になりましたが、2年前までは8月11日の山の日に合わせてイベントを開催していました。炎天下にも関わらず、来場者は市内外から約900人でした。熱中症対策もあり、今年はゴールデンウィークの5月2日に開催しました。来場者は約700人

で、たくさんの親子連れの方に楽しんでいただけたと思います。また、「MORIT AKANMA」では、学校行事などでも活用していただいています。それでは山本に代わります。

山本氏

では、再び私の方から説明したいと思います。最後になりますが、効果と今後ということですね。話の冒頭にも話したんですが、組合のイメージ、それから認知度、それから担い手不足ということで、まずイメージですけども、私が今着ております、この「山護人」っていうロゴ入りのユニフォーム。これは仕事中にも使ってもらっているのですが、行き帰りとか、そのコンビニに寄ったり、買い物したりとか、結構、皆さんがいろんなところで発信していただいています。ここ最近受けた報告はですね、小学生の一番小さい子だったんですけど、「山護人」がかっこいいって指さしてもらったと。かっこいいというイメージが結構定着してきているなということで、ちょっと嬉しかったなと思いました。

それから組合の認知度ですが、これはNHKやその他の民放、それから地元の西予CATVというところがあるんですけど、そこからの放映や自治体イベントへの参加、それから小学校や保育園対象の木工教室の開催により向上を図っています。西予CATVの視聴者層は中から高齢の人が多いですかね。山主さんのところ行ったら見たぞと言われたこともありました。また、小学校や保育園の木工教室において、小さなお子様を持つ親御さんは結構森林組合のことを知っていたいているなと思っております。

それから最後、担い手不足の解消ですかね。これはSNSでの直接の効果ではないのですが、地元高校へ出向いて林業教室を行っています。その影響だと思いますが、来年も4月から2人、組合に入っていただけの予定ということで、大変ありがたいと思っております。

最後になります。今後についてなんですが、担い手の確保という一言なんですけど、私と思うのは、どんな経営戦略があろうが、知名度が上がろうが、そして次世代に繋ぐための技術を持っていたとしても、それらは組織で働く人がいて初めて初めて成り立つことです。人がいなくなれば、どんな思想や戦略があっても会社は存続できません。これからの田舎は人が都会に出て行き、人手不足が加速していくと思っています。西予市森林組合は、これからもいろんなことに取り組んでいき、そして挑戦していきたいと思っています。それが担い手の確保につながるという強い思いを持って、これからも森林組合に就職したいと言ってもらえるような、いい組合にしていきたいと思っています。

短いですが、これで森林組合の取組の発表を終わらせたいと思います。

どうもありがとうございました。

活動発表

株式会社武田林業

代表取締役 武田 惇奨 氏



よろしくお願いします。武田林業武田です。木を伐らない奴が、どうしてここに立っているのかっていう話を最初にしないといけないと思います。我々がやっていることは、森の入口作りです。今日、冒頭のフィルムでも私も発見がありました。新人さんが山に入っていくシーンの時に、道ないのに入っているのかな、みたいな疑問を思いながら入っていたあのシーン、特徴的だったんですけど、山を俯瞰してみても、入口と言えるような場所ってないと思います。そして、どんどん山と接点がなくなっていった時に、今後、森林と関わってくれる人がいなくなっていく、そういうことを防いだり、また新たな間口を作るために森の入口作りをしています。

国土の7割が森林ですが林業者は3,000人に1人です。ちょっとざっくりした数字ですけど、地図で見てください。赤いプロットが1点だけあります。日本地図3,000点プロットしてみました。当社は、久万高原町の西に位置する内子町に拠点を置いているんですけども、ちっちゃすぎて見えない赤いプロットはあの内子町にあります。こちらをご覧ください。コロナ禍で出たニュースです。一番左下をご覧ください。林業、左端にありますね。これ何のニュースかというと、最も密ではない職種、最も密な職種は何かを示したニュースでした。林業、誰とも接しません。人との関わりが極端に少ないこの業界、どれだけ遠くにこの林業というメッセージを届けられるか、これが当社のミッションであると思っています。

改めて、自己紹介します。これ、祖父です。祖父と私。現在、内子町の方に住んでいますが、もともと福岡で働いていました。広告代理店でした。今は内子町を拠点に活動

をしています。私の小さい頃の思い出は、この祖父が作った山にあったんですね。祖父は四面無節のヒノキに絞ってやっていたそうです。当時は、1ヘクタールで1億円稼ぐと豪語していたらしく、孫である私は今どうやってそれを稼ごうかって悩んでいます。山が遊び場所だった私は林業に対してたくさん良い思い出があって、2017年ですね。ちょうど10年程前になります。祖父と同じこの業界に入りました。

当時、これ古いデータなので更新をしてないんですけど、やっぱり林業って3Kだったり、他の産業に比べて事故率12倍とか悪い話題もたくさんありました。特に親ストップ。やりたいて言っても親が止める。そのような業界だったそうです。ただ、内子町に私が入ってみると、上の写真、10年前の写真なんでみんな若いんですけど、当時、内子町で藤岡林業さんっていう林業会社さんがいて、平均年齢20代で10人以上いる会社。また下の写真、内子バイオマス発電が2019年から稼働し、小さな規模で自分たちで回せる木々を発電に生かすというような取組も始まっていた。こんな中に入っていた私は、もちろん木を伐らないって、最初に決めていた訳じゃないんですけど、実際は伐らない林業をやっています。

元々私がやっていた広告代理店、商品とかサービスを作って、CMとかチラシとかで皆さんに発信する仕事ですよ。これを山に置き換えて、みんな現場がすごく潤っていたので、僕はまた違う視点で取り組んでみようと思って、山の魅力を人々に街に届ける。この位置的にいうと禁っていう位置に立って皆さんをつなげていく、林業を下支えする禁業というふうにして、9年前にスタートしました。今年10年目です。

最初に開発したプロジェクトは消臭スプレーです。今日は玄関から入ってきていただいた時に少し何か香りがした記憶ございませんか。実は当社には調香師がおりまして、ヒノキやスギ、柑橘などを混ぜた本日限定のブレンドをディフューザーで焚いていました。この香り、記憶に直結するので、名刺配るよりも早いじゃないかと思って作ったのが「アントキノヒノキ」です。これ、じいちゃんと僕なんですね。あの時育ててくれたヒノキがあるから、枝葉とか木の部分を使って香りとしてライフスタイル製品を提供していけるということで発売スタートして10年です。

他にもいろいろやっています。今日、林業素材生産の話はここからは出ないと思うんですけど、ワンツーツリーフォレスト、これ、内子町にはスキー場がありまして、標高1,000メートルで夏場も冷涼な場所で林業のイベントをやって、これも今年で10周年目を迎えます。標高1,000メートルに1,000名集まる規模になりました。林業って日常的には皆さん触れることがないので、林業の日常を提供する、つまりは皆さんにとって非日常であるエンターテインメントとして林業を見せるというイベントをやって10年です。今年は8月22、23日に開催します。ぜひお越しください。内子町のスキー場でやっています。

いろいろ、こうやってやるんですけど、僕も林業、なんでこういう業界に興味を持ったかといったら、やっぱり山に入っただけの遊び場所ですごく楽しかったから入ってきたんですけど、やっぱり今どうしてもスマホに勝てません。ということで、ちょっと教育にも目を向けて取組をしてみました。これ、あの木を伐採して、その本数、伐採した本数を競うっていう伐採シミュレーションゲームなんですけど、2016年、プログラミング義務教育化になって以降、この取組も8年続いています。つまりは、林業を題材にしてプログラミング教育をやるということを8年前にやっていました。このように子供が興味を持っているエンターテインメント、学習に対して、その題材に林業をつなげていく、こういうことを得意としています。そうしないとなかなかこっちに向いてくれないっていう課題がありました。ただ、この取組は嬉しいことに評価をいただいて、2019年、グッドデザイン賞を受賞させていただきました。

いろいろやって、うちの娘はなんとか林業のイベント行った。その夏の最後の夏休みの思い出を書いていったんです

けど、夏休み全部1ヶ月半通して林業機械を書いてくれました。これすごく嬉しかったです。こんなことをやっているんですけども、とにかく林業を遠くに発信していく。そうすると素材生産からもっと遠ざかっちゃいました。これは内子町内でいろいろ端末整備をするという仕事を当社が請け負うことになりまして、1人1台GIGAスクール端末、これをうちが1,000台整備するっていう仕事なんですけど、なんと標高1,000メートルに1,000人が集う林業のイベントを開催するところから、小中学校11校のPC1,000台を設定するという仕事にまで行き着きました。

これは関係ないように見えて、僕はすごく大事なことだと思っています。最初に見せたコロナ禍のニュース、やっぱり接点がなかなかないっていうのが林業界のいいところでもあり、なかなか技術革新ないしコミュニケーションが生まれづらい、そういう環境の原因になっているところとも思っています。なので、武田林業という名を持って、いろんな業界に手をつなぎに行く。こういうことをやって林業の魅力を発信していきたい。そして、何か山のことが気になるとか、林業何か良かったなってなった時に、我々がガイドとして森の入口に立つということを事業としてやっています。

ちなみにこのPC1,000台、ICTサポートをしていく中で、DX支援までできるようになりました。これ一例なんですけど、今度はちゃんと林業の現場をサポートしたい。林業のDX支援のアプリ等を開発して、今年度様々な業者さんにお取引先様に体験を提供したいと考えております。

終わりに、人との関わりが極端に少ないという業界ですけども、この会場だけでも林業に関わる方々、これだけ一度に集まるのをなかなか見たことなかったです。この赤いプロットのドット、見えないんですけど、こういうところから関係をつないでいって、また林業の魅力発信、そして国土の7割3,000人に一人でどうやって守るか、問題を皆さんと解決していきたいと思っています。また、パネルディスカッションでお会いできればと思います。ありがとうございました。



活動発表

株式会社堀川林業

代表取締役 堀川 隆幸 氏



株式会社堀川林業の堀川隆幸です。本日はよろしくお願
いします。

私どもの新たな取組について発表させていただきます。
本日はまず弊社の概要について、次に担い手確保、育成
について、そして未来への森づくりについての順でお話しさ
せていただきます。

弊社は、愛媛県南西部の宇和島市を中心に事業を展開
しております。宇和島市は温暖な気候と豊かな海と山に囲
まれた南予地方の中心都市で、愛媛県内屈指の柑橘生産
地としても知られ、タイや真珠の養殖など水産業も盛んな
第一次産業が発達した地域です。宇和島市の森林面積は
約3万3,000ヘクタールで、市の面積の71%に当たります。
内訳は国有林17%、民有林83%で、民有林のうち人工
林の内訳はヒノキ73%、スギ24%と、県内でヒノキの生産
が盛んな地域で、その多くは利用期を迎えております。

堀川林業は、私の祖父の代に木炭生産をし、その伐採
跡地にスギ、ヒノキの苗を植栽したことから始まりました。
父の代は植栽と保育、枝打ちによる優良生産に力を入れて
いました。平成3年から私が家業に従事するようになり、そ
の頃から保育間伐から搬出間伐へと生業を移行し、高性
能林業機械を導入し機械化を図って参りました。平成22
年に堀川林業を法人化し、従業員5名、搬出間伐主体の
事業からスタートいたしました。現在は、11名2班体制で
主伐再造林にも取り組んでおります。また、弊社では平成
26年より森林経営計画を作成しております。所有森林を核
に隣接する森林を集約化し、経営計画を立てることで、計
画的に長期事業を考えることができるようになりました。造

林補助事業の活用で、森林所有者の経営負担削減と集約
化によるコスト削減を図ることができております。

さて、宇和島市は2020年の人口が約7万人であったの
に対し、その40年後の2060年に約2万5,000人と大幅
に人口が減少することが見込まれており、森林を守り育て
る林業の担い手確保、育成が課題と感じております。弊社
では、担い手の育成機関である南予森林アカデミーが実施
する研修生のインターンを受け入れております。また、県や
市が実施する森林教室にも積極的に協力し、将来的な林
業就業への裾野を広げたいと考えております。林業の仕事
を地域で理解してもらい、応援団を増やしていくことは、私
たちの誇りにもなり、やりがいににつながる重要な取組だと
考えております。

こうした連携の甲斐もあり、宇和島市と連携した新規就
業者の受け入れにより、移住者の方2名が弊社に就業し、
また南予森林アカデミーの卒業生も23歳、56歳の2名
を受け入れるなど、担い手確保につながっております。弊
社では従業員に安心して働ける環境を提供できるよう、最
新技術、最新の林業機械の導入に努めております。また、
従業員の雇用環境改善として、社会保険、各種手当、月
給制、週休2日制、給与・賞与の見直しを図って参りました。

また、林業関係のイベント等へ従業員の参加や研修、
視察旅行を実施し、会社全体で情報収集をしております。

従業員の負担を軽減するスマート林業への取組について
ですが、令和2年に森林GISを導入いたしました。多様な
森林情報を活用し、より効率的に森林経営計画を作成でき
るようになりました。令和4年にはGNSS測量システムを導

入し、今まで2名でコンパス測量をしていたのが1名で測量が可能になり、境界確認などがスムーズにできるようになりました。令和5年にはドローン及び画像解析ソフトを導入いたしました。現在、ドローンは植栽後の防護柵の点検や森林調査に使用しております。また、画像解析ソフトによる測量データは精度も上がっており、さらなる活用の広がりに期待しております。また、令和5年からデジタル黒板も導入しております。デジタル黒板を使うことで、現場での黒板への記入や持ち運びがなく、事前に必要な看板を作成でき、修正も端末操作でできます。ピントが合わせづらいなどの問題が解決し、綺麗な記録写真が残せるようになり、効率的に申請書作成ができるようになりました。こうしたスマート林業への取組により、労務負担の軽減が随分と図られてきたと感じております。

さらに、令和7年に四輪バギーを導入いたしました。移動時間の短縮になることや、移動が楽しくなるのではないかと導入いたしました。思った以上に悪路や急勾配でも快適に走れます。その他にも、雇用時の有効活用として、また雨天時の雇用対策として薪製造機を導入いたしました。主な販売先は、薪ストーブがある家庭や地元の石窯パンのパン屋さんなどです。このようにワンタッチで作業ができる機械で製造し、コンテナに積み、1シーズン自然乾燥して販売しております。

次に、未来への森づくりについてご紹介します。冒頭でも説明したとおり、宇和島市は第一次産業が非常に盛んな地域です。周辺や下流では自然の恵みを活かし、柑橘栽培や養殖、真珠養殖が盛んに行われています。地域で同じ自然を相手に生業を営む者として、自然に負荷をかけない、環境に優しい林業の実現が必要だと感じております。そこで弊社では、昨年、令和7年よりハーベスタやチェーンソーに使用するチェーンオイルをすべて生分解性オイルに変更し、森林はもとより、少しでも下流の川や海を汚さないように努めております。チェーンオイルを使用すればするほど環境に負荷をかけていくことになるため、林業業界全体で取り組むことが必要だと考えております。ぜひ、お集りの皆様もご検討いただけたらと思います。

また、弊社ではこれからの森づくりのために苗木生産にも取り組んでおります。令和5年より、林業用種苗生産事業者登録を行い、苗木生産を開始しました。令和6年にクス

ギのコンテナ苗の生産を開始し、令和7年度からヒノキの挿し木コンテナ苗にも取り組んでおります。写真はMスターコンテナでの生産と移植、保育状況です。自ら生産した苗木を次の世代につなげていきたいと思っております。

森林林業を良い形で次世代に繋ぐためには、今までの林業のイメージを変えていきたいと思えます。林業を魅力ある産業に変えていくことが重要です。そのためには、労働条件の改善を図り、他産業並みに引き上げることが急務と考えております。また、安全で働きやすい環境を整備するのも重要です。デジタル化や最新の林業機械と技術の導入と若手の育成に努める必要もあります。森林林業の社会的評価を上げることとして、森林保全、災害防止、水源保護、CO₂の吸収と社会のインフラを守る仕事であることをさらに広めることも大事だと思っております。取り組む課題は山積みですが、できることから取り組んでいき、次世代に魅力ある林業として引き継いでいきたいと思えます。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



活動発表

久万高原町林業戦略課 課長 小野 哲也 氏



久万高原町役場林業戦略課の小野と申します。私からは久万高原町の林業についてご説明をさせていただきます。時間の都合上、要点を絞ってご説明させていただきます。

まず、久万高原町の概要でございます。久万高原町は愛媛県の中央部に位置する高原の町で、平成16年に4つの町村が合併して誕生いたしました。総面積は県内最大で、標高300メートルから1,000メートルの山間部に集落や農地が点在しています。また、仁淀川の源流を抱く自然豊かな町でございます。

次に、久万高原町の森林林業についてご説明申し上げます。本町は、町の多くを森林が占める森林資源に恵まれた地域でございます。森林の中ではスギ、ヒノキが多く、町の林業を支える大切な資源となっております。また、齢級構成を見ると成長した森林が多く、大径材として利用できる木材が多いことも特徴でございます。素材生産量は年度によって増減がありますが、約22万立方メートルと、毎年多くの木材が生産されており、林業は本町の重要な産業の一つとなっております。

次に、久万高原町の林業の変遷についてでございます。久万林業は、明治時代に大宝寺の住職である井部栄範が植林を進め、住民に苗木を配ったことから本格的に始まったと言われております。昭和30年代から40年代には、久万地域独自の育林技術が確立され、良質な木材を生産する久万林業として知られるようになりました。現在は木材生産だけでなく、加工や人材育成も含めて持続可能な林業と地域振興の両立を目指しております。

次は、林業事業体についてでございます。本町には意欲と能力のある林業経営者や認定林業事業体のほか、自伐林家など小規模事業体が多く存在しております。これらの事業体が主伐や搬出間伐、保育間伐、植栽などを担っております。一方で、主伐再造林を進める上では、造林や保育を担う人材が不足しており、担い手の確保が大きな課

題となっております。

続いて、森林環境譲与税の活用です。令和元年度から始まった森林環境譲与税について、本町では6年間で約10億円を活用させていただいております。主な用途は、森林整備、林道や林業専用道の整備、林業就業者の育成などでございます。森林整備を進めるだけでなく、作業道などの基盤整備や将来の担い手育成にも活用をさせていただいております。

次に、町の主な施策についてでございます。林業経営支援事業では、自伐林家などが林業機械を購入する際に補助を行っております。近年ではバックホウやフォワーダ、トラックに加え、運搬用ドローンなども対象としており、林業の省力化や効率化につながっております。こうした支援により、生産性の向上と森林整備の促進、併せて林業就業者の確保を図っております。

また、令和3年度からは林業版地域おこし協力隊を募集し、林業後継者の育成にも取り組んでいます。協力隊員は3年間、指導林家の下で基礎的な技術を習得し、卒業後は森林経営管理制度における保育間伐などの仕事を請け負いながら、技術と経験を積んでいただいております。現在までに2名の隊員が卒業し、1名がミッションに取り組んでおります。この取組は、地域の担い手確保と将来の林業人材の育成につながるものと考えております。

最後に、森林経営管理制度の取組でございます。令和5年度には全町を対象に森林所有者への意向調査を実施いたしました。その結果をもとに、町への管理委託を希望する森林を抽出し、現地調査や集積計画案の作成を進めております。今後は、所有者の同意を得ながら、市町村森林管理事業による保育間伐につなげていく予定でございます。また、その作業を自伐林家など小規模事業体へ発注することで、地域の担い手育成にもつなげていきたいと考えております。以上、簡単ではございますが、久万高原町の林業について説明を終わります。

株式会社さんえい

代表取締役 佐ヶ山 幹彦 氏



本日はこのような機会をいただき、誠にありがとうございます。株式会社さんえいの佐ヶ山幹彦と申します。未来へ繋がる林業の形をテーマに発表いたします。

弊社は久万高原町で林業を生業として設立いたしました。設立以来、森をどう次の世代に繋げていくかを軸に、林業を中心にしながら関連会社の設立など事業の幅を少しずつ広げているところです。

私たちが今大切にしている考えが森林×林業×デザインです。森は守り育てるだけでなく、新しい森の活用をデザインし、森林の価値をどう社会に届けていくか、そこまでを含めて林業だと考えています。Total Forest Service。これがさんえいの理念です。林業は木を伐って終わりではありません。植えて育てて使い、また植える。この一連の森林のサイクルを仕事として大切にしています。森は長い時間をかけて育つものです。だからこそ、今だけでなく、その次の世代、その次の世代、またその先まで見据えた林業、森づくりを心がけています。

弊社は設立当初から高性能林業機械の導入にも積極的に取り組んできました。機械化は決して安い投資ではありませんが、安全性と作業効率を考え、必要なことだと判断してきました。事故を減らすこと、作業する人の身体的負担を減らすことは経営として外せない部分です。機械化は人を守り、若い人たちが仕事を安心して続けるための投資、そう考えて取り組んで参りました。

現在、さんえいでは、自社で森林経営計画を立て、施業前の調査から森林整備、原木市場への木材の運搬まで一連の作業を自社で行っております。また、県下に先駆け、フェラーバンチャザウルスロボを活用し、先行した路網開設を行うほか、オペレーターの育成により最適な造材や工夫した作業土場の活用を行い、施業の効率化や素材単価の向上に努めております。これはフェラーバンチャザウルスロボの作業の様子です。回転するバケットにより、自由な方向で作業でき、ものを掴むことができます。そして、一番

優れた機能は木を伐るということが出来る機械です。機械化によって現場の安全性と生産性は大きく向上しました。その一方で、森の価値は素材生産だけだろうかという問いが生まれました。

そこで、私たちが一つの転換点として掲げたのが、森林×林業×デザインという考え方です。林業を軸にしながら、森の価値を別の形でも社会に届ける。その挑戦がここから始まりました。まず取り組んだのが、森と人が直接つながる機会づくりです。植樹体験、林業現場の見学、森を知ってもらうイベント、森に入ってもらい、木に触れてもらう。そうした体験が林業への関心につながっていくと考えています。

次に取り組んだのが、商品開発を通じたアプローチです。林業と接点のなかった方にも、森を身近に感じてもらえるように、次のような取組を始めました。木の香りを楽しめるバスグッズ、犬用のおもちゃ、磨き丸太を使ったインテリア、端材を生かした空間作りなどです。森や林業に関心のなかった方にも、商品開発や販売などを通じて森を身近に感じてもらえる場を提供しております。

森の価値を引き出す方法は、木を伐って育てるだけではありません。林業という産業は、他の分野や産業とつながることで新たな可能性が生まれ、森林の価値が高まっています。そして、林業がより開かれた産業になっていくと考えています。多方面に広がることは林業の未来につながる、そう考えています。

森は一代では作れません。先代の方々が植え、大切に育てたから、久万高原の豊かな森が作られています。これからは、私たちの選択が未来の森につながっていきます。林業の形は一つではありません。森を守って育て、そして社会とつなげていく。これからは、さんえいは、森と向き合いながら、新しい林業の形に挑戦していきます。本日は、ご清聴ありがとうございました。

活動発表

愛媛県立上浮穴高等学校 森林環境科生徒の皆様



皆さん、こんにちは。愛媛県立上浮穴高等学校森林環境科です。本日はこのような貴重な大会にお招きいただきありがとうございます。発表続きで、眠くなってくる頃とは思いますが、しっかりと起きて聞いていただけると嬉しいです。

それでは早速ですが、私たちの発表をさせていただきます。本校は昭和16年に愛媛県立上浮穴農林学校として開校され、名称変更や学科改編を経て、今年度創立86周年を迎える伝統ある学校です。私たちは日々、学習で林業について学んでおり、本校の卒業生も地元久万高原町を中心に林業関連産業で活躍されています。まずは少しでも日本の林業の現状を押さえます。

日本は国土の約70%を森林が占める森林国であり、特に戦後に植栽された人工林が育成期を経て本格的な利用期を迎えています。令和4年3月時点での森林蓄積は約56億立方メートルとなっており、そのうちの約6割は人工林です。年齢構成のグラフからもわかるように、現在、山にある多くの木が樹齢50年を超えており、樹齢の偏りが顕著に表れています。木材利用に関しても、住宅着工戸数が減少傾向にあり、国内の木材消費の低迷要因にもなっています。私たちの地元、久万高原町においても、総面積の実に90%近くが森林であり、そのうちのおよそ80%が人工林です。私たちの学校に通う生徒の保護者や卒業生にも、林業を営んでいる方、森林組合や市場、製材所に勤めておられる方が多く、この町が林業に支えられ、林業とともに発展してきたことがよくわかります。伐採適齢期を迎えた森林は多く、森林資源の循環の観点からも、林業後継者の育成や魅力発信は喫緊の課題です。

本日は、私たち林業を学ぶ高校生だからこそできる様々

な活動に関して、1.林業後継者の育成、2.林業・木材利用の魅力発信、3.新たな取組と今後の挑戦の3つを紹介いたします。

1. 林業後継者の育成

森林環境科では、1年次から科目、農業と環境、森林科学などが開講され、農業や林業に関する基本的な知識と技術を習得します。ピンク色の科目がすべて農業や林業に関する科目です。2年次からは育林、園芸、木材加工の3つの部門に分かれ、より専門的な知識と技術の習得を図ります。校内での授業や実習に加え、町内外でのインターンシップ、刈払機や伐木に関する安全講習など、関連企業や団体の力を積極的にお借りしています。学校では限界がある内容でも、専門的な知識や技術を得られ、実際に林業現場で働かれている方々の話も聞くことができ、大変貴重な学びができています。木や山の管理はもちろん、チェーンソーや高性能林業機械の操作、そして森林や環境を守っていくことの大切さを教わり、技術以上に林業に携わる人材としての心構えを養っています。

また、地元自治体久万高原町のご支援をいただき、毎年ドイツ方面への海外研修を実施しています。平成30年度から昨年度で5回目となり、夏休み中の1週間、海外で林業や街づくりについて学びます。研修を通して、自然への敬意、自然環境と街づくりの調和など、異国の地で久万高原町とは違った森林との向き合い方を肌で感じることができ、大変貴重な経験になっています。

こちらは過去5年間の卒業生の進路です。林業関連の数値を示しており、括弧の数字はクラス全体の人数です。令和8、9年は現在の3年生、2年生が希望している参考数値です。農業などを含めた第一次産業全体の進路に括

ると、その数値は上がり、クラス人数を考慮すると他校にも引けを取らない実績になっています。ただ、毎年2名程度の林業関連の就職、進学者を輩出していますが、林業を学ぶ学校として、今後はさらにこの数値を伸ばしていく努力が必要だと考えています。学校での授業、実習に加え、どんどん地域に飛び出し、林業に携わる方々に実際の現場のことを教えていただきたいです。

2. 林業・木材利用の魅力発信

続いては、木を使うこと、そして林業の魅力を発信する取組について紹介します。

木材を扱う意義として、木の炭素固定作用や災害防止などの環境的側面、そして暮らしに木を入れることによる癒やしや安らぎなどの心理的側面が挙げられます。授業では様々な木工製品を製作、各自が考える工夫を凝らし、イベントや交流学习で幅広く発信する取組を行っています。本日も2階のブースで限定商品、スパイスやカレー、木工製品などを販売しておりますので、ぜひお立ち寄りください。

その中でも特筆すべきは、過去の先輩方から引き継いできた木材打楽器カホンを使った交流活動です。ペルーの民族打楽器であるカホンは直接座って演奏することができ、技術や音感を問わず幅広い世代の方々に楽しんでいただけます。久万高原町産の木材を使用して製作しており、この交流活動を通じて地元産の木材や森林のことを多くの方に発信しています。参考までに、過去に製作したカホンでどれぐらいの炭素固定がなされたかの数値です。カホンの1台当たりの重量はスギ材で換算し、およそ2,458.6グラム、炭素含有量は乾燥重量の5割程度であるため、1台当たりの炭素はおよそ1,229グラムとなります。これをレジ袋に置き換えると、1枚当たり3.5グラムの炭素を含むレジ袋およそ351枚分に相当する計算になります。これまで製作してきたカホンは累計1,500個を超え、およそ50万枚以上のレジ袋に相当する炭素量削減に効果があることが分かりました。

私たちのこれまでの活動は多方面から多くの評価をいただいております。昨年度も7月の内閣総理大臣表彰に始まり、農業クラブ活動でも日頃の林業の学びを生かし、輝かしい賞をたくさんいただきました。テレビや新聞で私たちの活動を取り上げていただく機会も増え、日々の学びを通じて地域に大きく貢献できていることを実感しています。また、Instagramのフォロワー数も大きく増加。明日開催される全国植樹祭に向けたカウントダウンボードも製作し、林業を学ぶ私たちの勢いは止まりません。木を使うことは森を守る

こと。今後もこの言葉を胸に、森林の役割やその資源を有効に活用する意義を伝え、木材に対する理解を深めてもらえる活動を進めていきます。

3. 新たな取組と今後の挑戦

今後も林業の学習に意欲的に取り組み、知識と技術の習得に努めます。

本校は地域の方々との連携が図られており、これまで以上に連携を図り、現場でしか学べない知識をご教授いただきたいです。現在、地元の林業家の方々のご協力をいただき、高校生としてJLC（日本伐木チャンピオンシップ）の大会出場に向けた動きを進めています。これには知識と技術はもちろん、自治体の熱いご支援が不可欠です。私たちの学校を、地域をさらに盛り上げていくべく、ぜひともご協力をお願いいたします。また、林業現場で必要になってくる小型車両系建設機械やフォークリフトの資格取得も目指します。林業現場においては重宝されるスキルであるため、卒業後に即戦力の人材として活躍できるよう頑張ります。そして、学校の存続をかけ、私たちの活動をどんどん中学校に発信し、入学生の確保に向けた取組を継続します。私たちの活動で今後も地域を盛り上げられるよう、これからも歩み続けます。以上で発表を終わります。



パネルディスカッション

【テーマ】

森林・林業を次世代へ引き継ぐための挑戦
～いま求められるもの、取り組むべきこと～

コーディネーター

愛媛大学

副学長 杉森 正敏 氏

パネリスト

愛媛県林業研究グループ連絡協議会

元会長 増田 清 氏

西予市森林組合

参事 山本 和可 氏

会計主任 辰己 恵 氏

株式会社武田林業

代表取締役 武田 惇奨 氏

株式会社堀川林業

代表取締役 堀川 隆幸 氏

株式会社さんえい

代表取締役 佐ヶ山 幹彦 氏



杉森コーディネーター

愛媛大学の副学長を務めております杉森と申します。本日、よろしくお願いいたします。

本日は、次世代に引き継ぐための挑戦ということで、現場から今ということが重要かということを言語化していただいて、次にやることを会場全体で共有する場といたしたいと思います。

最初にパネラーとして、このディスカッションから加わっていただきました、愛媛県林業研究グループ連絡協議会の元会長の増田様より自己紹介をやっていただきまして、今ということが問題なのか、こういうものの現状把握について5分ぐらいですね、併せてお話いただければと思います。

増田氏

今ご紹介いただきました元林研の会長の増田と申します。私が会長をやっていたのは、今から20年ほど前、約6年間やらせていただきました。その間での一番の思い出は、明日、植樹祭でお見えになる天皇陛下が皇太子殿下の時代にご臨席をいただきまして、昭和天皇が植栽された杉を、枝打ちをされたことを覚えております。また、その時に、皇太子殿下からお言葉を賜りまして、今、何やっているんですかとお話を伺いまして、現場でチェーンソーで木伐っています。保育間伐をやっていますと答えましたところ、皇太子殿下から振動病は大丈夫ですかと聞かれまして、えっ、皇族の方はこんなことまで心配されているのかと、本当にいい思い出でエピソードとなりました。

それで、もともと私は林業と縁のない家庭で育ちまして、大学を卒業して、縁あって山林がある、ここの隣にある西予市の城川町というところに養子へ来ました。その親が、町長をしております、もともと山林が200ヘクタールほどありまして、当時、昭和30年、40年代、ご案内のとおり拡大造林が進みまして、その間、そのうちの約半分ほどでしょうかね、十何年間植えました。私がその長女と結婚して、林業のことは何も知りませんので、県の森林組合連合会をお願いをして、3年間そこで勤務して、県内各地の森林組合さんの現場を見させていただきまして、研修もさせていただいて、その後、城川町へ帰りました。当時は林業事業体っていうのはありませんでした。森林組合だけでした。それで、生業は森林組合の作業員の方々と、ご一緒させていただいて、皆さん方からご指導をいただきながら林業を覚えていったということです。

あの当時は、路網は、ほとんどございませんでした。架線集材中心で、私のところは高知県境、梶原町との境にな



杉森コーディネーター

りますので、割合高いところなんで雪も降りますし、急峻なところなので、路網を作るのもなかなか難しいところがありまして、路網整備については、愛媛県では久万高原町から波及しております。それが県下各地に流れていって、今の現状になっているんですけれども、その時に架線作業の難しさっていうのもつくづく思いましたし、架線作業の良さっていうのも思いました。大量に集材できるんですね。路網の場合は、あくまで限られておりまして、なかなか路網の長さが500と1,000とか超えると、やはり効率が悪い。そういった中、申し上げましたように、拡大造林、植栽して、当時、私のところの親は8,000本から1万本植えていました。だからそれを育てていくのにどうすればいいのかということで、当時大体3,500本ぐらいだったと思うんですよ。育林技術体系、先ほどの香川の会長さんもおっしゃっておられましたけど、それが確立されておりましたので、それに基づいて下刈り、下枝落とし、除伐、片枝打ち、それから20年から30年かけての間伐、それから30年過ぎでの収益を上げる間伐を40年ぐらいやりまして、今50年から80年生の木が大体7割ぐらいになってきています。私が思いますのは、やはり今ある木っていうのは、育ててきたからあるんだと。それが基本だと私は思っております。

今日発表がありました皆さん方、大変素晴らしい仕事をなさっていると思いますし、最後に発表した上浮穴高校の学生たち、その取組は、本当にびっくりしております。さすが久万高原町だと思っております。そういった意味で、また後ほど申し上げるかもしれませんが、県下全域での担い手確保の施設、林業大学校ですけれども、愛媛にはまだありません。それもどこか作る一つのきっかけになってくれれば、ありがたいなと思っております。以上です。

杉森コーディネーター

どうもありがとうございます。戦後から今に続く人工林の林業。ありがとうございました。また後ほど伺いたします。

次に、西予森林組合のSNSを駆使した担い手確保イメージ戦略について、先ほどの発表でも非常に印象深かったんですけども、ずっとやってきて、今現状で何が一番訴えたいかということがあれば、まず山本さんからお願いできますか。

山本氏

今、訴えたいことっていうのがあったんですが、最後に私が言いましたけども、やっぱりいろんな戦略や、これから何をすべきかっていうことは色々あります。次世代に何を受け継ぐか、そのチャレンジとかあるんですけども、地元宇和高校から平成30年ぐらいから毎年入ってきているんですけども、やっぱりあとが入ってこなければ、後継ぎも出てこないということで、幸いにも順調に入っているんですけども。これを途切らせないように魅力ある会社にしていきたいと。ざっくばらんなんですけども、それが一番やらなければならないことかなと思っております。

杉森コーディネーター

どうもありがとうございます。人材の確保を途切れなくということで、若い人をずっと入れていきたいという、ここが大事だということをお聞きいたしました。それで、西予市森林組合の辰己さんがSNS戦略を担ってられるようなんですけれども、そちらの面から今の参事のお話の跡継ぎ、次から次に若い人を入れるとか、その辺のところ、今、お感じになっているところ、何かお気づきになるところはありますか。

辰己氏

ご紹介に頂きました辰己です。よろしくお願いします。実は今、私は会計の仕事をしていて、SNSとかホームページに関しては別の女性職員が担当しているんですけど、立ち上げ当初は私が携わっていたということで、今回参加させていただきました。その女性職員も私と同じ思いを持っていて、先ほど山本の話にあったように、若い担い手の確保に関して思うことは、林業って森林組合に入るまで何もわからなかったんですけど、実際入ってみて、ここで働いてみて思ったのは、「林業って何か思っていたよりずっとカッコいいんだよ」っていうことをすごく感じるんです。それを発信したいと思って SNS も始めたので、担い手確保に関して思うことは、「林業はカッコいい」ということを広めたいなと思っているということです。



増田 氏

杉森コーディネーター

ありがとうございます。林業ってカッコいい。また後でどの辺がカッコいいと思われるかも伺いできればと思います。

それでは次に、武田林業さんは森の入口からこう、街とかいろんな人とか子供とかをつなぐイメージをいただいたんですけども、このつないでいる時に最もこうつないだなっという瞬間。思うところがあればお教えていただきたいんですけども。

武田氏

はい、そうですね。森の入口をミッションにしているので、やっぱり体感として新たに林業に関心を持ってきてくれた人たちが、ちょっと山見てみたいんだけとか、何かそういう具体的なアクションに移った時は体感としてあるんですけど、実はこの森の入口をやってきて、すごくつないだと思うところは身内側に僕はあってですね、「ワンツーツリーフォレスト」っていうイベントを紹介したんですけど、それまではその林業事業者さんとか森林組合さん、もちろん取引はあるんですけど、何かこう、あのイベントで集まって、一緒に同じ方向を向いて話し合うみたいなきっかけって、どうやら無かったのかもしれない、っていうのがちょっと自分の中にはあって。それをきっかけに、あの地元のセーフティーネットとまではまだいってないんですけど、本当に森林組合さんをはじめ、いろんな方々が林業の発信をして、カッコいいね、スタイルいいっていうので、職場として求められつつはある。だからそこは、あの基礎としてできてきている中で、入ってきた人が辞めないとか、辞めようと思っても他の事業者がサポートやフォローをして地域や県で守っていくみたいな、

何かこの素地がそのイベントを通じてできてきたなっているがあります。なので、質問に戻ると、このつないだなっているのは、実はちょっと身内の方で、なんかこう、みんなでこうバックアップしていくみたい、そういう体制をチラッとちょっと見た時とかにそう思いました。

杉森コーディネーター

どうもありがとうございます。地域定着がこう身内のところから実感されたっていうのが印象的でした。

地域定着のことにに関して、ちょっと堀川林業さんの方に就業環境や労働環境の改善等も含めて、スマート林業とか人材確保を進めていらっしゃるということでしたけども、今のお話のような定着っていうものの実感として、最近現状で感じられていることがあればお願いします。

堀川氏

従業員の定着についてですか。

杉森コーディネーター

そうですね、移住者が入ってこられたとか、そういうところも含めてお願いします。

堀川氏

移住者、今まで過去10年で7名ぐらいは、移住の方を受け入れてきたんですけど、今3名残っています。理由はまあいろいろあるんですけど、今までの私の経営の中の失敗を反省するところもありまして、人間関係というところで離職されるのが一番多かったかなと。そういうところの改善の雰囲気作りとかが大事だなと思い、昨年ですけど、一人女性の現場でも働いてくれる方が入りました。女性が一人、現場にも出ていくと、今までの雰囲気がガラッと変わって、良いところを見せたくなったりするところもあり、それから自然と職場内の雰囲気も変わって、離職は減っています。



山本氏

あと、その就業環境と雇用環境、給料なり今の年配の方なり、子供さんがいるような40代の従業員の方はどうしても休みも必要ですけど、お金も必要になってくる。できれば雨の日に振り替えがあれば必ず出社してくれたり、また、独身の若い子はどうしてもプライベートを重視したいので休みが欲しいとか、そういうところをいろいろ個々に合わせた環境を整備するのも、最近は大事だなと感じております。

杉森コーディネーター

どうもありがとうございます。失敗って割と先につながる場合がありますので、また後ほど失敗の部分についてもお聞きしたいかなと思いました。いろいろと移住の方をつなぎ止めていらっしゃるなという印象を受けました。どうもありがとうございます。

次にさんえいさん。さんえいさんも、いろいろな担い手確保という手法で、森と木と人とか、林業と街をつないでいくような、木を通じてつないでいたり、デザインをつないでいたりしているのかなと思って聞いていたんですが、同じような形でうまくつないだとか、担い手確保できているんだなっていう、このトータル的林業のうまくいったところとか、感じたところあれば教えていただけますか。

佐々山氏

はい。当社ではほとんど地元の人を雇用しております、自分の身内の従業員もいます。こうした従業員が知り合いや友達を誘って入社してくれるというようなことがほとんどなんですけど。だからやっぱり会社自体がそういう明るくて、また賃金もある程度の水準があって、休みも安定しているというところで知り合いを誘ってくれて、入社してくれるということがあっていいんじゃないかなと思います。

昨年は京都の林業大学校を卒業した方も入社してくれました。それは当社の関連の会社のお子さんと、お父さんの方がうちへ就職したらどうであろうかということで斡旋してくれたような形で入社をしてくれました。リクルートというか、職業安定所みたいところに募集はしてないんで、縁故と紹介によって新たな人材が入っているというような状況でございます。

杉森コーディネーター

どうもありがとうございます。先ほどの発表を思い起こしていただけたと思います。

では、次にお聞きしたいのは、今回のテーマとしては挑戦ということがありますので、上浮穴高校の発表でもありましたけど、上浮穴高校の学生さんたちがインターンシップとか短期型インターンシップとか、そして現場でしか学べないことを教えて欲しいと言っていましたけれども、これに関してどんなことを今まで若い人たちに教えたり、つないでみたりして手応えがあったかとか、あるいは失敗したなっていうこともあれば教えていただきたいなというふうに思うんですけれども、どなたからお話伺いしましょうか。また順番に行きますか。増田さんなんかは長年おやりになっていかがでしょう。上浮穴高校の発表で現場でしか学べないことを学びたいということだったんですが、どういうことを伝えたいですか。

増田氏

私が会長の時代に、安倍総理だったと思うんですけど、美しい国づくり、美しい森づくりというのを提言されまして、森林再生事業というのをやられましたでしょう。それで、それと同時にインターンシップ、これを進められるということで、私の地元にも上浮穴高校生も来られましたし、西条の西条農業高校ですかね、そこも来られて定期的にやっていまして、また地元の中学生や小学生を対象にやったり、私の所属する単位林研でも県林研の事業の中の一環としてやらせていただいた経験もあります。

それで私、今、エフシーという会社の取締役なんですけども、そこにも週2、3回か4回か、来て現場を体験してもらった経験もありました。ただ、残念ながら地方は子供の数がもう極端に減りまして、中学校で今、旧城川町には一つしかないんですけども、各学年12、3名しかいない。もう本当に情けなくなっておりますが、その子たちがふるさとを愛してもらうためには、ふるさとのことを知ってもらわないと、と思っています。林業教室は大人気でやっておりまして、まあなかなか本当にどうすればいいか、解決の代替策がちょっとないんで、模索している状況です。まあ森林組合さんもやってらっしゃいますので。

杉森コーディネーター

はい、ありがとうございます。今、増田さんからきっかけをいただきましたので、森林組合さん、そのインターンシップ等みたいな、高校生たちが現場でしか学べないことを教えて欲しいと。どんなことを教えてられますかね。



辰己 氏

山本氏

すいません。コーディネーターさんとか会場の皆さんが求めている答えかどうかはわかりないんですけども、高校に限らず、今、保育園や小学校、それから地元の愛護班とか、今年度も、もうすでに数件、ぜひぜひやって欲しいということで依頼をいただいております。

林業をアピールっていうのは、重機の操作とかチェーンソーで木を切ってもらったりとか、そういうことはしてもらっているんですけども、ちょっと私は変則的な考え方でして、組合に「MORIT」という施設があるっていうのは言ったんですけど、その山の中で、いろんなことを楽しんでもらいたいということで、木工品を作ってもらったりとか、そういういろんなことを取り組んでもらっています。

今一番やっているのが、地元の野村高校と、それから宇和高校ですかね。実際、宇和高校については自分の山を持っていらっしゃるの、その山で林業の機械を使ってもらおうということの体験をしていただいています。

単にその林業を教えるっていうのがすごく大切とは思いますが、ちょっと私は変わっておりまして、例えば冬の寒い時にやるので焚き火というか、ほぼキャンプファイヤーみたいな感じのことをやっています。今の子は、なかなか火を使うということを知らないっていうことで、インターンシップでもそうなんですけども、焚き火とかやってあげると、そこに1時間ぐらいずっと座ってカメラで撮っています。そういうふうな、ちょっと変則的なところではあるんですけど、林業だけでなく、私としてはやっぱり森林組合の雰囲気を感じてもらっているっていうか、そういうことをしています。

インターンシップにしろ林業教室にしろ、結構インスタと

かを通じてやってくださいっていうのがありまして、今年ももう5件〜6件入っているんで、まあまあそういう意味では挑戦になるかなと思っております。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。確かに山の中で焚き火、ずっとあたたっていると楽しかったり癒されたりしますので、とてもいい話だと思いましたけども、辰己さんはそういうのをバックアップされているんですか。そのSNSを通じたり、組合としていかがですか。

辰己氏

そういう企画はさせていただいて、企画というか、こういうのはどうかなっていう提案をしたら、隣の山本参事がすぐに動いて何でもやってくれるので、どんどんイベントはやってもらっています。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。イベントをきっかけにっていうのもあるんですけども、武田林業の武田さんも高校生から先ほどのような、現場でしか学べないって、伐らない林業なんですけども、それをどういうふうに教えられていきますかね。今、思われてることで結構ですのでお願いします。

武田氏

うち、本当に伐っていないので、現場を見せると思ったら周りの方に頼るんですけど。私が使っている林にカタカナのターンでリンターン。これには意味が2つあって、インターンシップのターンと林に戻ってくるっていう、Jターンみたいなフレーズなんですけど、それを7年前ぐらいから活動として地域とやってきました。それは1泊2日とか、コロナ前はですね、コロナ以降も1日で川上から川下まで順繰りに巡っていくっていうツアー形式のもので、実は愛媛大学の生徒さんとかにも、いい教授がいて、ちゃんと単位をつけてくれるっていう形で、旅をしながら林業を学ぶっていうことをやっていた。なので受け入れるコンテンツはたくさんあるので、そこら辺はぜひ引き続きやっていきたいなと思います。

最初の増田さんが提起された話題に戻ると、やっぱりその大学じゃないですけど、カリキュラムを持った仕組み化された施設があるっていうのは、一つ注目を集めつつ、ちゃんと県下に流れる人材を作れる確かなルートにはなってくるので、なんかその手始めじゃないですけど、1泊2日のそういうなんか資格が取れる訳じゃないですけど、安全講習とかそういう形で学校のプログラムとも連携した、あの1日なのか、午後の2時間なのか、なんかそういうカリキュラムを一緒に作ってみたいです。



武田 氏

杉森コーディネーター

ありがとうございます。林ターンですね。なんかこういうの使えそうなので、全国の皆さんも持ち帰っていただけたらと思います。

堀川林業の堀川さん、先ほど失敗したとかいう話もありましたけれども、高校生たちが現場でしか学べないことっていう、例えばバギーでも面白いと思うんですけども、伝えたいこととか教えたいことをちょっとお知らせいただければと思います。

堀川氏

伝えたい。そうですね。うちの従業員とかにも、まあその林業って今、儲からないっていうイメージが強すぎると思うんですよ。儲かるところには人が集まるじゃないですか。やっぱりどこかで林業でも儲かるっていうところを見せてあげると、イメージも変わるんじゃないかなと。昨年なんですけど、130年生のヒノキを伐採して、いつも出荷してる木材市場の記念市に出させてもらって、その時は従業員全員で行って、いくら売れたかというような体感してもらっていたんです。まあ、そこそこの値段で販売していただき、従業員もびっくりしたような感じで、そういう儲かるところっていうのも見せて、魅力の一つにしていきたいなと。

失敗したっていうのは、何かというとIターンとかUターンとか受け入れたんですけど、指導する方が未熟だとかなかなかうまく受け入れても定着につながらないということで、指導する人も育てないといけないというのが反省です。



堀川 氏

杉森コーディネーター

ありがとうございました。先ほども林業大学のこともつながるのかもしれませんが、ありがとうございます。

佐ヶ山さんの方は森林×林業×デザインということですが、高校生がインターン来られたりすると思うんですけど、いかがでしょうか。

佐ヶ山氏

私、久万高原町の事業体なんで、上浮穴高校には何回もインターンシップに来ていただきまして、高性能林業機械の操作とか、今の林業は、こういう林業だよということを体験してもらうようなことはやっております。中学校、地元の美川の中学校ですけど、そちらの生徒も受け入れて、そういう機械の操作みたいなこともやらせたりして、林業に関心を持ってもらう、若い世代から関心を持ってもらうようなことを取り組んでいます。また小学校の方でも林業教室をしておりまして、木工教室をしたりとか、シイタケの植菌とか、そういう面で小学校の子供たちとも関わりを持っております。昨年ですか、松山近郊の幼稚園の卒園生の方がちょっと知り合いの関係で植樹をしたいということで、山の植樹にも参加をしていただきまして、小さい子供たちにも自然や林業に触れるようなイベントも行っています。

また、一昨年から別会社を立ち上げまして、林業と関係する6次産業的なものを発表の中にもあったんですけど、今まで山に捨てていたようなものを活用しまして、いろんな商品を作って販売をするというようなことも手がけていっておりますし、またこれからも範囲を広げていきたいというふうな考えでいます。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。6次産業化のところで、木材で木工品を作るとかだけではなくて、アロマオイルとかそういうこ

ともやってもらえるようで、どれが若い人に受けているんでしょうか。

佐ヶ山氏

クロモジを使ったバスグッズといったものもよく売れますし、一番というのは犬のおもちゃですね。あれが結構ペットを飼っている方、犬を飼っている方が多いので、そういう犬のおもちゃみたいなものが結構人気があります。

ちょっと飲食店の方もやっておりまして、犬を遊ばせながら飲食できるようなスペースも今やっておりますので、そういうところで林業との関わりも作りながらやっております。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。発表で出ていた犬が噛みついて犬がくわえている、あれはヒノキですか。

佐ヶ山氏

針葉樹はささくれるので危ないんです。あれは桜ですね。広葉樹の桜の板で加工したというようなものでございます。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。ご教示いただきまして、いろんなつなぎ方があるんだなと思いました。

担い手の人、林業をうまく教えるっていうのをメソッド化するとか、教え方も大事だっていうことがあったんですけど、増田さんにその教え方としてどんなことを工夫されたことがあるのか、お伺いしてよろしいでしょうか。架線もおやりになったということですけども、増田さんの方から何かこう、長年教えられてきたところもあると思うんですけど。

増田氏

今、高性能林業機械が全盛ですよ。昔は、高性能林業機械はありませんでした。道を抜くのも、ブルドーザーしなくて、ユンボもなかった時代でした。それが、先ほど申し上げましたように、路網搬出が主体になりました。完全に高性能林業機械の時代になったんですが、問題は伐倒なんですよ。伐倒技術、チェーンソーです。これがやっぱり一番大事だと。昔はですね、下に木を倒しちゃいけないと、衝撃を受けるから。必ず後ろに倒すんですよ。ということで、チルホールも使いますし、後ろから引っ張るんですね。経験のある方いらっしゃると思いますが、ヒノキの片枝の部分をですね、後ろに引っ張り倒すなんてとてもじゃないけどできない、力が、だからチルホールを使うと。そんなことをいろいろ試行錯誤しながら、育林をやってきたという時代でした。今はほとんど横か下ですよ。路網に届くところに倒すやり方になると思うんですけど、ちょっとそれも問題があるのかなという気が私はします。



佐々山 氏

杉森コーディネーター

すいません、横とかに倒すのはどこに問題があると思われるのかも教えていただけますか。

増田氏

先ほども言いましたように、裂ける可能性があるんですよ。特に急傾斜地の場合に下へ倒すと裂けるという場合もあるし、滑ってどこまで行かわからない。非常に危険なんです。そういう、特に昔はマツ、特にアカマツなんてのは一回滑りだしたら止まりません。特に重たいし、非常に危険だったという経験があります。そういったところは、今はもうほとんどマツはありませんから、スギ、ヒノキが主体なんですけど。さっき言いました、出す木を大切にしないといけないと思います。下へ倒したら残った残存木を傷つける可能性が高いですよ。その辺のところは注意しないといけないと思います。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。伐って使う木そのものも大事にするし、周りも傷つけないようにすることも大事にしようというお話、ありがとうございました。

かなり時間も経ってきたんですけども、ここまで、次世代へ引き継ぐための挑戦、あと増田さんからは伐倒技術もきちっと教えて欲しいという、技術伝承ですかね、といことを伺った気がします。皆さん、メソッドも重要だ、教える方、皆さんがこう教わってきて、あ、これはって思うことがあったと思うんですけども。山本さん、いかがですか。どういう教え方が良かったかとありましたか。

山本氏

今、増田さんから話がありましたが、私は平成7年にこの業界に入っているんですけども、平成7年の当時はやっぱり山の価値がありましたので、山の木の扱いはかなり気を

使ってやったと思います。確かに下に倒せば木が裂けますし、横に倒せば木を傷つける。いろんな意見がありましたけども、今現在は、悲しいことに、あの何ですかね、高性能林業機械をうちも相当取り入れてはいるんですけども、高性能林業機械はもう下へバタバタと倒して、運搬車で、木を出すための道があるんですが、そこに向かって倒すと。今、まさしく増田さんが言ったとおりなんですけども、伝える技術っていうのもちょっと全く異なってはきているんですけども、やはり伐倒技術だけはどうしたって昔と変わらない。上に倒すか、下に倒すかの差なんではあるんですけども、やはり伐倒技術はどうしたって今も、私は事務職員ですので、直接技術を教えることはできないんですが、そこら辺がやっぱり今伝えるべきことなのかなと。機械の使い方もちろん大切ではあるんですけども、やはり木を倒す技術がなければそこに結びつかない。木を倒して、それを全部機械が切って運んでくれるということで、まあ随分、この30年でやり方は変わったと思います。

私が一番感じるのは技術もあるんですけども、やはりその山林所有者の意欲というか、山に対する気持ちというか、今の時代、都会に出てらっしゃる方は、ほぼ山にちょっと悲しいことに愛着がございませんので、随分変わってきたと思っています。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。伝統的な技術というか、昔の技術を次に伝えるのもかなり、ある意味挑戦ですし、新しい機械、高性能な機械を使っていくのも挑戦かなというふうにしてお聞きました。

今のところで、堀川さんはいかがですか。

堀川氏

昔は、もう見て覚えるという、僕らの時代はそうだったんですけど、今は教え方一つで従業員の成長のスピードも随分違うと思いますし、それよりは、自分の身は自分で守れる技術っていうのが、怪我をさせない雇用主としてはそこが一番大事かなと思います。過去は生産性向上という、やっぱり仕事が雑になるし、怪我につながるということもあるので、やはり自分の身も守れる技術で、同僚に傷をつけないっていう技術が大事かなと思います。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。今日の発表の中にもありましたけど、林業というと非常に労働災害が多い危険な現場だということもありましたので、その安全を確保するというのも非常に一つの挑戦と受け取りました。

林業の技術の変わり方は、さんえいさんはどう考えられていますか。

佐ヶ山氏

時代の変化がありまして、もう高性能林業機械が普及して、安全面ではだいぶ昔と違ってきています。機械操作で仕事ができますので。一番機械化ができないのが伐倒になります。伐倒が危険を伴うということですね。あとはもうほとんど人間が直接木に触れることはない。今は伐倒が終われば後は全て機械でできるというような形の作業の状況なので、安全性はだいぶ確保されたかなと。だから、やはり機械をうまく使って、効率よく安全に、一番は、安全なんですけど、安全に効率よく仕事をする。材価がこれだけ安いんですから、かなり大量に生産しないと収益が上がらないんですが、そういう面で機械化は大事なんで、私どもも設立当初から機械化を進めて今に至っているという感じがすかね。

杉森コーディネーター

どうもありがとうございました。

もう16時17分ということで、当初の予定を過ぎておりますけれども、今のお話を皆さんやはり一番大事なこと、次世代へ引き継ぐというのが、まず人口減少等もあり、人材の確保、担い手の確保、そのために安全な林業や労働環境、ただやはり伐倒も非常に大事というお話が、伐倒もというか、伐倒が基本というお話も皆さんから出てまいりましたので、その辺りこれから技術伝承のところできちっとメソッドを作るのが私たちのような大学の人間の役目かもしれないんですけど、考えたいなと思いました。最後にですね、そういうことを踏まえて魅力の発信、一言いただけますか。増田さんからお願いします。

増田氏

これ私の個人的な考えなんですけども、この会議が始まる前に久万林業のビデオがありました。その中で岡慎一さん、岡譲さんの息子さんなんですけど、独立されて、息子さんの森林を見に行かせてもらったことがありまして、200年生ぐらいのスギだったと思います。よく子孫に美林を残すなんて言いますが、やっぱり僕は子孫に美林は少しは残すべきだと思うんです。やっぱり切ったら100年かかるし、

200年かかる。愛媛県の武道館。あれができた時に、県下各地を県森連の参事が回りまして、費用が2億4千万、1本が350万という木を集めたんです。それがなかなか見つからなかった。私のとこに来ましたけど、残念ながら12メートルのところで幅がなかったんですね。40センチ。だから、そういう木もね、やはり少しは残しておかなきゃいけないですね。まあ、それぞれ所有山林が違いますから、一概には言えませんが、やはり先代が残した木もある程度は残しておくべきではないかと。何かの時に使えると思うんで、そういう木が私は好きです。変なこと言いましたね。

杉森コーディネーター

いえ、ありがとうございます。心に沁みました。

山本さん、魅力発信一言お願いできますか。

山本氏

林業、私も先ほど言いましたが、イメージが悪い、汚いとかあるんですけども、私もこの田舎に帰ってきて森林組合で働いたわけなんですけれども、それまで全く林業を知らず、組合に入ってもスギやヒノキもわかりませんでした。負の財産とかいろいろ言われてるんですけど、やっぱり私はこれまでずっと森林組合で所有者さんとの付き合いの中で、そんなに悪いことはないと思っています。山によっては材価は悪いんですけど、お返しする山もあります。これは条件いろいろあるんですけど、森林組合の給料が安いとか何とかいう金額は言えないんですけども、実質そんなに私は悪い業界とは思っていません。増田さんが言ったように、それこそ一本数百万円するとか、そういう木もまた存在しておりますし、決してそんなに価値がないとか、森林組合は廃るとかいろいろ聞くんですけども、そんなことはない業界ですので、ぜひぜひ、これからいろんなアピールをして、それをわかっていただけたらなと思っております。

杉森コーディネーター

どうもありがとうございます。

辰己さんの方からは魅力発信のメッセージをお願いできますか。

辰己氏

林業は危険なことも多いので、もちろん安全も考慮しながら技術を受け継ぐこともかっこいいし、私が森林組合に入ったのは17年前なんですけど、その頃と比べたら、作業着にしても防護ズボンにしてもヘルメットにしても、全て今誰が装着してもかっこいいと思うんです。だから林業はひっくり返って全部かっこいいということを魅力発信していきたいと思っています。

杉森コーディネーター

全てがカッコいいと。ということで、武田さんのほうからいかがでしょう。

武田氏

あの活動発表では、コロナ禍のニュースを林業に接点がないみたいな言い方をしたんですけど、やっぱり山はいいじゃないですか。僕はあの、比較対象じゃないですけど、海より山というか、山でゆっくり森林を眺めながら過ごすってめちゃくちゃ好きなんですけど、そういう時間を作ったり提供したりするコンテンツも人も愛媛県はかなり揃ってると思います。今度、上浮穴高校の生徒さんがアロマの当社の製造工房へ勉強しに来てくれるんですよ。これは彼らから言ってくれたんですけど。だからそういう打診をして、ちゃんと受け入れられるものが各地にできていて、森の入口が各地域に既にあるので、ちゃんとコミュニケーションを取って行って、しっかりその輪をつないでいけたらいいのかなと思います。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。山から得られるものはいろいろとある。多様なものを森の入口から紹介していただけるということの話。ありがとうございます。

堀川さん、魅力発信について、最後お願いできますか。

堀川氏

西予市森林組合さんを見習って、弊社もSNSでよりカッコいいところを見せていきたいです。そして選ばれる事業体として、就労環境とかも整えて行って、本当に働きたい職場だっていうところを目指していきたいと思います。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。佐ヶ山さんお願いします。

佐ヶ山氏

堀川さんもありましたけど、就業環境もありますし、会社の利益が上がらないと何も動かないということなんで、利益を上げて従業員に還元ができる。利益配当ができるぐらいの利益を上げて配当を渡して、気持ちよく働いてもらえるというような環境を作っていきたいと思います。

杉森コーディネーター

ありがとうございます。申し訳ありません。もうあれよあれよという間に時間が経ちました。この辺でまとめたいと思います。

とにかく今一番大事なことは、次世代に引き継ぐために担い手確保が必要であろうと。そのために何のために担い手を確保するのか。美林を次の時代へ、次の世代へ。そ

して山の恵みを地域とつなぎたい。カッコ悪い仕事ではなく、カッコいいんだよっていう魅力をSNSで見える化して発信したいということを皆様から教えていただいた気がします。

長時間ありがとうございました。ここでパネルディスカッションの方を終了させていただきます。本日はありがとうございました。



閉会式典

大会宣言

本日、私たちは、愛媛県久万高原町に集い、「人と技 つなぐ愛顔(えがお)の森・未来」をテーマに、「人と技」が、過去から現在、そして未来へと引き継がれ、みんなが愛顔(えがお)になれるよう意見を交わしました。

森林は、木材生産活動を通じ、二酸化炭素の固定による地球温暖化防止や、地域住民の安全・安心の場の提供などに貢献しています。この社会共通の財産を持続可能な森林として未来に引き継ぐために、いま求められるもの、取り組むべきことを、それぞれの立場で真剣に考え、実践していくことが重要です。

そのためには、先人の培ってきた技術に、最新の技術を取り入れながら、時代に即した新たな林業を確立し、「伐って、使って、植えて、育てる」サイクルを循環させながら、多様性や多様な主体による森林づくりを一層進める責務があります。

私たちは、その後継者として、森林・林業の魅力や重要性を発信し続け、人々の理解を得るとともに、やりがいや誇りを持って働くことのできる産業となるよう、人と技術と豊かな森林を次世代に引き継いでいくことを宣言します。

令和8年5月16日

第54回全国林業後継者大会 愛媛2026



愛媛県立上浮穴高等学校 森林環境科 3年

山本 琴美氏 秋山 敬太氏

次期開催県挨拶

第55回全国林業後継者大会
奈良県実行委員会会長

安田 宗一 氏



ただいまご紹介にあずかりました、第55回全国林業後継者大会奈良県実行委員会会長の安田でございます。次期開催県を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。

このたび、第54回全国林業後継者大会が愛媛県において盛大に開催されましたこと、心よりお喜び申し上げます。本大会の準備・運営にご尽力いただきました愛媛県林業研究グループ連絡協議会をはじめ、愛媛県、久万高原町など大会実行委員会の皆様、並びに関係各位の皆様方に、深く敬意を表しますとともに、心より感謝申し上げます。

さて、来年奈良県では、「第77回全国植樹祭」が開催されますが、その前日に奈良県橿原市におきまして、奈良県では46年ぶり2回目となる「第55回全国林業後継者大会」を開催いたします。約500年前、日本で初めて本格的な植林が行われた奈良県吉野地方では、「長伐期・密植・多間伐」という独自の山づくりにより、通直完満で無節の良質な材を育てまいりました。開催地である橿原市は、吉野郡への玄関口に位置し、わが国最初の本格的な都城として知られる藤原宮跡を擁しております。現在、この藤原宮跡を含む「飛鳥・藤原の宮都」は、県内4つ目の世界遺産登録を目指して取組が進められております。森林と歴史、文化が重なり合う奈良の地で、皆様をお迎えできますことを、大変光栄に存じます。

来年の奈良県大会では、大会テーマを「この手から じだいをひらく 森林(もり)の価値」と掲げました。林業に携わる多くの皆様はもとより、森林に関心をお持ちの方々にもご参加いただき、森林の多様な価値を分かち合い、次世代へと引き継いでいく有意義な機会としたいと考えております。本日の愛媛県大会での取組をしっかりと学ばせていただき、奈良県ならではの特色ある大会となるよう、開催準備を進めてまいりますので、奈良県橿原市にて、皆様のお越しを心よりお待ちしております。

甚だ簡単ではございますが、次期開催県を代表してのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

閉会の言葉

第54回全国林業後継者大会
愛媛県実行委員会副会長

芝 芳亀



皆さま、大変長時間にわたりお疲れ様でございました。本日は全国各地から後継者大会にご参加をいただき、重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。

愛媛県を代表する林業地でありますこの久万高原町で、このように盛大に大会が開催できましたことは、誠に光栄であり、森林林業関係者一同として身の引き締まる思いであります。

本日ご参加の皆様におかれましても、森林・林業振興に向け、それぞれの地域で、それぞれのお立場で、今後益々ご活躍をされますことをお祈り申し上げます。

それでは、以上をもちまして、「第54回全国林業後継者大会 愛媛2026」を閉会いたします。本日は大変ありがとうございました。

展示、物販、大会記念品等

展示

愛媛県林業研究グループ連絡協議会の会員13団体や愛媛県立上浮穴高等学校、愛媛森林管理署、愛媛県森林組合連合会の取組事例等をポスター掲示しました。



物販

愛媛県林業研究グループ女性会議の会員9団体による手作り産品等や愛媛県立上浮穴高等学校の生徒が開発した桃太郎とまとハヤシソースやぶちきびカレーなどを販売しました。



大会記念品等

箸と箸箱

久万高原町の豊かな森で育った木材を、木目が揃うように丁寧に切り出し、蜜ろうワックスの塗布により、コンパクトで持ち運びやすく、普段使いに最適なデザインに仕上げました。使い捨て箸の代わりにこのマイ箸を使うことで、エコな暮らしも実践できます。手に取るたびに、森からの恵みが感じられる久万高原町産の杉と檜で製作した箸と箸箱を皆様にお届けします。



大会の状況



大会会場



大会看板・のぼり



大会チラシ



大会宣言書



大会ポスター



総司会



会場客席



久万高原町制作映画「久万山を歩いて、」の上映



石鎚天狗太鼓の演奏



開会式典



活動発表



パネルディスカッション



閉会式典 大会宣言



閉会式典 次期開催県挨拶



閉会式典 閉会の言葉



受付



受付の様子



おもてなし広場



おもてなし広場 休憩所の様子



おもてなし広場 出店の様子



おもてなし広場 出店の様子



送迎バス



交歓のタベ

第54回全国林業後継者大会愛媛県実行委員会

令和6年12月19日設立

委員等	所属	職名	令和6年度	令和7年度	令和8年度
会長	愛媛県林業研究グループ連絡協議会	会長	菊池 俊一郎	菊池 俊一郎	菊池 俊一郎
副会長	愛媛県森林組合連合会	代表理事専務	芝 芳亀	芝 芳亀	芝 芳亀
委員	愛媛木材青年協議会	会長	堀本 周平	堀本 周平	堀本 周平
委員	愛媛大学大学院農学研究科	准教授	川崎 章恵	川崎 章恵	川崎 章恵
委員	久万高原町林業戦略課	課長	小野 哲也	小野 哲也	小野 哲也
監事	愛媛県農林水産部林業政策課	課長	薬師寺 雅明	中屋 佳吾	中屋 佳吾
オブザーバー	愛媛県農林水産部全国植樹祭推進室	主幹	信高 浩二	信高 浩二	信高 浩二

※設立時

事務局

役職	所属	職名	令和6年度	令和7年度	令和8年度
事務局長	愛媛県農林水産研究所林業研究センター	センター長	鈴木 教幸	薬師寺 雅明	西原 寿明
次長	愛媛県農林水産研究所林業研究センター 連携推進室	室長	真木 賢二	河野 伸治	河野 伸治
主幹	〃	副主幹	渡邊 邦彦	渡邊 邦彦	渡邊 邦彦
事務局員	〃	担当係長	玉置 教司	玉置 教司	玉置 教司

大会参加者数

(人)

区分	県外	県内	計
主催者	1	3	4
来賓	4	2	6
国・中央団体等	26	5	31
林業関係団体等(出演、発表者含む)	134	173	307
スタッフ・運営本部	0	82	82
合計	165	265	430



実行委員会第2回総会 令和7年5月7日



大会当日の準備状況



スタッフジャンパー

協 賛

ご協賛いただいた皆様ありがとうございました



愛媛県森林組合連合会

宇摩森林組合

いしづち森林組合

越智今治森林組合

松山流域森林組合

久万広域森林組合

伊予森林組合

砥部町森林組合

内子町森林組合

大洲市森林組合

八西森林組合

西予市森林組合

南予森林組合

南宇和森林組合

愛媛県
木材市場連盟

一般社団法人
愛媛県木材協会

愛媛県林業労働力
確保支援センター

大木坑木有限会社
宇和島出張所

菊池林業



株式会社

久万木杣市場



よく燃えて、よく働く。四国の薪。

四国薪販売

SHIKOKU MAKI HANBAI



松本林業

愛媛県
森林土木協会

愛媛県
林業事業体会議

大森商機
株式会社

株式会社
清水林業

株式会社
ニシイチ

株式会社
堀川林業

愛媛木材青年協議会

愛媛森連産業株式会社

株式会社久保建設

四国建販株式会社

有限会社新宅農園

有限会社ナルカワ

株式会社プロシーズ

愛媛県
林業研究グループ
連絡協議会

四国中央地区
林業研究グループ
連絡協議会

新居地区
林業研究グループ
連絡協議会

周桑地区
林業研究グループ
連絡協議会

今治地区
林業研究グループ
連絡協議会

中予地区
林業研究グループ
連絡協議会

上浮穴地区
林業研究グループ
連絡協議会

喜多地区
林業研究グループ
連絡協議会

八西地区
林業研究グループ
連絡協議会

西予市地区
林業研究グループ
連絡協議会

宇和島地区
林業研究グループ
連絡協議会

南宇和地区
林業研究グループ
連絡協議会

愛媛県
林業研究グループ
青年会議

愛媛県
林業研究グループ
女性会議

第54回全国林業後継者大会愛媛県実行委員会 事務局
(愛媛県農林水産研究所林業研究センター連携推進室内)

〒791-1205 愛媛県上浮穴郡久万高原町菅生2番耕地280-38
TEL: 0892-21-2266 FAX: 0892-21-3068
<https://www.pref.ehime.jp/page/109585.html>